

会津史談

平成30年(2018)

昭和六年創刊 第92号

戊辰一五〇年を考える



会津史談会

戊辰後一五〇年を考える

会津と長州

一 はじめに

会津では戊辰一五〇年というが、薩長では維新一五〇年という。ちなみに、京都は大政奉還一五〇年である。日本の歴史の一五〇年という同じ節目を迎えるに当たって、立場が違えば思いも違ったものになるのはやむを得ないことであろう。中でも、会津と長州(山口)の間には、*「怨念」*が残雪のように残っているといわれる。

筆者は、飯盛山で自刃した白虎隊士の中で唯一蘇生した飯沼貞吉の孫に当たる。生まれは仙台で、二十七年間この地で生活し、東京に移って四十七年になる。白虎隊の会を設立したのは平成二十二年で、以降、白虎隊を中心に歴史を振り返ってきた。「白虎隊の会」会員は、現在約百四十名で、会津(福島)が一番多く、二番目は下関(山口)である。お蔭で、

会津にも長州にも沢山の友人ができ、双方の本音を聞く機会に恵まれている。

筆者の立場は血筋で言えば、会津の血が四分の一流れているので、会津びいきになることは否めない。しかし、会津に住んだことはなく、東京での生活が長い。電子工学の研究開発技術屋で、作家・物書き・歴史家でもないの、比較的ニユートラルではないかと自認している。そこで、本稿では、会津と長州について述べ、相互理解の一助とならんことを期待する。

飯沼 一元

(東京都世田谷区在住)

二 会津と長州の確執

二― 東西の主張

会津と長州の確執を扱った出版物は多数発刊されている。仮に、会津寄りを左派、長州寄りを右派と呼ぶと、左派には

原田伊織（文獻1）、星亮一（文獻2、3、4）、鈴木莊一（文獻5）、早乙女貢（文獻6）など多数ある。これに対して、右派は少なく、八幡和郎（文獻7）ぐらいであろうか。中立と思われるのは半藤一利著「幕末史」（文獻8）であろう。中には、感情的と思われる主張もあり、対立を煽る原因となるので筆者には受入難いものもある。

例えば、原田氏は『明治維新という過ち』（文獻1）の副タイトルとして『日本を滅ぼした吉田松陰と長州テロリスト』としているが、その根拠が明確に記載されていないため、吉田松陰を「先生」として敬愛する長州人を逆撫でするであろう。

一方、八幡氏は「会津の悲劇に異議あり」（文獻7）の帯に「松平容保は忠義の士ではない！」と書いてあるが、論拠が十分でないため会津人から見れば、不快と思われるだろう。史実を冷静かつ大極的・客観的に見て、根拠を明示して論証すべきと思われる。もともと、両氏とも「史実に基づいてのこと」と自信満々なのであるが、いかがなものであろう。

二 住民感情

よく会津でタクシーに乗ったら、「お客さんどちらから？」と聞かれ、「山口」と答えたら、「お客さん、悪いけど降りてくれないか」と言われたとか、飲み屋でも同様の会話で、追

筆者としては、この問いに一分間で回答できる解をこの場を借りて明確にしたい。

三 怨念の根源

怨念の根源は、①朝敵・国賊、②埋葬問題、③拳藩流罪の三点に絞って論じたい。この他にも暴行・強姦・略奪等もあったであろうが、戦争ともなれば多々発生することであり、会津戦争特有とは言えないので除外しておく。冒頭に挙げた左派寄りの文献には、これらについても相当のページが割かれているが、感情が入るので却って論点をあいまいにする危険がある。

三 朝敵・国賊

幕末の会津藩は、京都守護職時代を通して、他のどの藩にも増して、天皇に忠誠を尽くした。それにも関わらず、戊辰戦争では朝敵・国賊というレッテルを貼られ、壊滅した。この問題は明治維新の本質にも関わる重要問題であり、筆者はこれが怨念の最大要因と考えている。

敗戦後の会津人は、ひたすら朝敵の汚名払拭を願っていた。そのような中で、松平容保公の孫娘（六男松平恒夫の長女）勢津子妃と昭和天皇の皇弟・秩父宮雍仁親王との婚儀が実現

い出されたというもつともらしいエピソードがあると言われる。昔はそういうことがあったのかもしれないが、今どきの会津ではないと思われる。

尤も、筆者の友人が十年ほど前に、会津に観光旅行した時、タクシー運転手から、「お客さんどちらから？」と聞かれて、「ギクツとした」というのは実話である。彼は、薩摩藩士の末裔であるが、「東京から」と答えて「難を逃れた」そうである。運ちゃん、特に出身地を吟味しようとしたわけではなく、旅行者を歓迎するつもりで、声をかけたのだろうが、本人が過剰反応したのである。「脛に傷を持つ」と過敏になることは良くあることである。

五年ほど前になるが、京都の会津びいきの飲みやで長州出身の友人と一杯やっていた時のことである。偶然、会津の古老が入ってきて三人で飲み談義が始まった。古老氏は自称「会津っば」、「長州は会津で酷いことをやった。絶対に許せん」としゃべり出し、友人はびっくり。タジタジとなる友人を相手に、一時間以上説教が続いたのを覚えている。

長州の友人からは、ほぼ共通して、「なぜ、長州が会津から憎まれるのか理由を教えてください」と言われる。彼らは、明治維新を主導したのは長州であり、敗者となった会津がいつまでも愚痴を言うのは、いかがなものか？との思いがある。

した。昭和三年「一九二八」九月二十八日のことである。朝敵の領袖とされた松平容保公の孫の皇室への入輿は、会津藩の汚名返上に繋がり、会津人の感激は大変なものであったという。飯沼貞雄（貞吉改め、雅号は孤舟）は、この時の喜びを歌に残している。

飯沼の 千代の根ざしを 見るからに そら舞う田鶴も
おりてあそばん （孤舟）
よろこびを かわすことばに どよむらん いいもり山
の 苔の下にも （孤舟）

姫松に松平家の姫である勢津子嬢をかけてあり、この婚儀を飯盛山に眠る白虎隊の戦友たちも喜んでいようだろうと、彼らを思いやる気持ちを含んでいる。

しかし、このご成婚で怨念が消えたわけではない。現在、この婚儀を知る人は少なく、ましてその意味合いを理解できる人は殆どいないだろう。会津戦争では、「会津は錦旗を掲げた官軍と戦ったのだから、朝敵であり国賊である」との認識が日本人の多数を占めると思われる。

三 幕末史の検証

会津が朝敵か否かについて幕末史を整理して検証してみたい。そのための筆者なりの論点整理を以下に示す

(1) 朝敵とは朝廷(天皇)に背く行為をした側を指す。「勝てば官軍、負ければ賊軍」というのは筋が違う。

(2) 幕末の会津藩は朝廷に背いたことはない。京都守護職時代(文久二年「一八六二」)八月から慶応三年「一八六七」十二月)は、ひたすら孝明天皇に忠誠を尽くした。(文献10)

(3) この間、長州藩は禁門の変(文久三年「一八六三」)八月十八日)で御所に発砲し、天皇の拉致を謀ったため朝敵とされた。

(4) 幕末の日本は外国から開国を迫られ、開国が攘夷かを巡って紛糾した。攘夷は水戸藩が強く主張した。孝明天皇は「攘夷」派であったため、「尊王攘夷」論が台頭したが、尊王攘夷ではない。尊王攘夷は孝明天皇を抱き込むための旗印である。しかし、その後幕府の海外視察や長州、薩摩の対外戦争(馬関戦争、薩英戦争)などを通して、海外とは技術力で圧倒的な差があることを知り、幕府のみならず薩長も、次第に攘夷は非現実的であるとの認識に至った。会津藩は、一貫して、尊王かつ親幕(佐幕)、即ち「公武一和」であった。

(5) 京都を舞台とした天誅と称するテロ行為や池田屋事件等を通して、公家による偽勅の発行、天皇の囲い込みを巡って熾烈な抗争が展開されたが、慶応元年(一八六五)十月五

四年二月)。松平容保も恭順の意を表し、会津御薬園にて謹慎(慶応四年二月)。

(12) 五箇条のご誓文発布(慶応四年三月十四日)。「広く会議を興し、万機公論に決すべし」は長州の木戸孝允の発案による。

(13) 徳川慶喜の駿府への移封が決定。江戸城を無血開城(慶応四年四月)。

(14) 奥羽列藩同盟が成立。(慶応四年四月二十二日)

(15) 会津戦争の開始と終了。(慶応四年八月二十二日)九月二十二日)

(16) 函館戦争の終了。(明治二年「一八六九」五月十八日)

以上の経緯の中で倒幕を達成し、新政府が実質的に樹立したのは、江戸開城の慶応四年四月である(原田氏文献9)。この時点で、徳川も会津も恭順して謹慎しており、戦争を終結させれば、無駄な犠牲を払わずに、新しい時代を開けたはずである。

新政府が発布した「広く会議を興し、万機公論に決すべし」という新しい理念に向けて大きな一歩を踏み出せたはずである。

しかし、新政府は徳川の恭順と駿府への移封は認めたが、会津の恭順嘆願書は無視し会津に一万二千の大軍を送って朝敵のレッテルを貼って殲滅した。

日、孝明天皇は遂に通商条約締結の勅許を出し、攘夷論は終止符を打った。

(6) その後、薩摩と長州は薩長同盟の密約を締結(慶応二年「一八六六」一月二十一日)し、倒幕に向かった。西洋式武器の調達及び軍隊の訓練に先行した長州は第二次長州征伐で幕府軍を撃退した(慶応二年六月七日)。

(7) 一方、幕府側は、徳川家茂の死去(慶応二年七月二十日)、により、徳川慶喜が第十四代征夷大将軍に着任(慶応二年十二月五日)したが、有効な対策は打ち出せなかった。

(8) 孝明天皇の突然の崩御(慶応二年十二月二十五日)により事態は急変、会津は後ろ盾を失い、薩長は岩倉・三条らの公家と結託して倒幕に奮進した。

(9) 徳川慶喜が大政奉還を奏請(慶応三年「一八六七」十月十四日)したことを知った岩倉具視らは、その前夜、中山忠能・三条実愛らの名前で松平容保らを誅殺せよという倒幕の密勅(偽勅)を出し、錦旗の捏造に取り掛かった。

(10) その後、西郷隆盛が勅許によるクーデターを画策し、倒幕体制を整えた。薩長軍は京都鳥羽伏見の戦いで新式武装の威力を実証した(慶応四年「一八六八」二月三日)。新政府軍は捏造した錦旗を掲げ東征進軍したため、佐幕派は朝敵とされた。

(11) 徳川慶喜が恭順の意を表し、上野寛永寺に謹慎(慶応

西軍が会津戦争に邁進したのは、禁門の変をはじめとする京都守護職時代の会津藩への復讐であろう。会津としては、報復はやむを得ないとしても、いわれのない「朝敵・国賊」の理不尽を許すことができない。六年に亘る京都守護職を経験して松平容保の天皇への忠誠心は増し、幕府への忠誠心は低下していった。特に、徳川慶喜に翻弄されたことは、慙愧に絶えなかったであろう。天皇への忠誠は何にも増して重要な会津のプライドなのである。

なお、奥羽列藩同盟が成立したのは、東北諸藩が会津の立場を理解した証拠と言える。

三―三 埋葬問題

怨念の二つ目は約三千人の戦死者の埋葬の扱いに対する怒りである。埋葬は大きく分けて二回に分けて行われた。第一回目は終戦後間もない明治元年「一八六八」十月三日から十七日、新政府により敗戦処理担当として現地に設置された民生局からの埋葬指示に従ったものである(文献11)。記録によれば、合計五百四十五体で、人足はのべ三百八十四名、経費は七十四両となっている。

会津若松市の西軍墓地にある「長藩戦死十五人墓」には、戊辰十月と刻まれている。会津に進撃した長州藩は十月十二日に猪苗代を出発し、東京に向かった(文献12)。戦友の遺

骸を放置したまま、帰国することはできなかったたのである。なお、この時の長州藩指揮官は檜崎頼三で佐幕派降人四百余名を東京に護送する命を受けていた。

残る遺骸のうち、約千二百八十は明治二年二月から三月にかけて、阿弥陀寺に埋葬された。この間の五か月は郭内の井戸に放置されたり、雪に埋もれたりしたのである。この埋葬に際して、民生局からは

(イ) 遺体片付けの工夫は旧藩時代から罪人の遺体を処理していた人を使うこと

(ロ) 埋葬場所は罪人遺体埋葬地とすること

の二つの条件が課せられた。会津を朝敵・国賊として葬るためである。町野主水らは、これに激しく抵抗し阿弥陀寺埋葬の許可を得たのであるが、民生局が集めた人夫は遺体を瓦礫のように粗末に扱ったので、怒り心頭に達したのである。(文献13)

この埋葬を主導したのは民生局察方頭取として乗り込んだきた久保村文四郎であった。久保村は松平春嶽配下の越前藩士である。武士の心のひとかけられないこの仕打ちはどうしても許すことができなかった。そして、七月二日、民生局改葬方、会津藩士伴百悦、高津仲三郎らは帰途に着く久保村を尾行し、越後で殺害したのである。

なお、埋葬に関して「埋葬禁止令」は出されていない、と

た(文献14)。木戸は復讐を恐れできるだけ遠地に退けたかったのであろう。

斗南生活の悲惨さは、柴五郎の『ある明治人の記録』(文献15)に詳述されているが、飯沼関弥(貞吉の実弟)の以下の文からも分かる。

飯沼家の記録によると、一家七人で五戸在の種原というところで開墾を始めた。

種原には藩庁で建ててくれた掘立小屋が五十戸位あり、開墾の土地は一戸につき一反歩くらいだった。今まで荒地の原野であったところを、鋤で開墾しようとしてもうまくいかず、殊に肥料が不足で何を作ってもろくなものは取れない。南瓜もじゃがも大豆もとうもろこしも、実のつく事が少なく、収穫は不良。冬になると陸奥湾から吹きつけるやませ(地方特有の北風)が強烈で部屋を突き抜ける。暖炉の傍でも氷点下一〇〜一五度で、米俵にもぐり込んで寒さを凌いだ。翌年祖母幸が亡くなったが、埋葬は郊外の小さな共同墓地がやっとだった。『藻汐草』(文献16)

挙藩流罪の結果、会津には武士がいなくなった。明治四年に廃藩置県が施行となり斗南の会津人には「勝手次第」の沙

いう反論があるが、禁止令がないことは埋葬を自由にできることを意味しない。埋葬は民生局の指示によって実施され、その方針は罪人処理であった。埋葬処理に対する会津人の怒りは、多大な犠牲を払ってまで天皇に忠誠を尽くしたのに、朝敵・国賊として処理された理不尽から来るのである。

三―四 挙藩流罪

怨念の三つ目は、戦後の斗南移封である。会津藩士とその家族約一万七千人が、極寒不毛の下北半島に強制移住させられ、うち約三千人が飢えと寒さで死んだとされる。

徳川宗家四百万石は七十万石に減封されて駿府(静岡)に移封され、会津二十八万石は三万石に減封、斗南移封とされた。

我が国の内戦後処理で、会津のような、挙藩流罪は類を見ない。移住先は当初は蝦夷とされたが、途中で斗南に変更となった。「猪苗代が斗南かを提示した結果、会津藩は斗南を選択した」との説(文献7)があるが、筆者は当時の会津に自由な選択権があったとは思わない。

当時の政治の実権は長州が握っていた。蝦夷に決めたのは大村益次郎である。

一方、北海道開拓使は薩摩の黒田清隆であり、開墾に武士は向かないという理由で反対した結果、木戸が斗南に決定し

汰が下り、半数程度の人が会津に戻ったのは明治六年のことである。この間の五年間で、会津の市街地は新政府から町人等に売却され、士族のかおりはなくなった。鶴ヶ城が政府から松平家に払い下げになったのは明治二十三年(一八九〇)、会津若松市長に、旧会津藩士が就任するのは、明治三十年(一八九七)、鶴ヶ城が松平家から会津若松市に譲渡されたのは昭和二年(一九二七)のことである。

「斗南への移転は会津が希望したものだし、不毛の地でもなかった」とか、「明治体制で会津武士はむしろゴネ得気味に優遇された」(八幡氏文献7)との主張にはノーと言いたい。明治の海軍および陸軍の上官は大半が薩長出身で占めた(文献8 三九五ページ)。山川健次郎、大山捨松、柴五郎らを引き合いにして優遇されたというが、彼らは血の出るような努力の賜物として歴史に名を刻んだのである。

四 会津と長州の接点

本節では会津と長州の接点について、まとめてみたい。

四―一 秋月悌次郎と奥平謙輔

二人の最初の出会

会津藩士秋月悌次郎が松平容保公から中国、四国、九州諸

藩の調査を命じられたのは安政六年「一八五九」、時まさに安政の大獄（安政五年）の直後のことである。秋月は日新館を飛び級で卒業したのち、抜擢されて江戸の昌平坂学問所に留学していた。幕府直轄の昌平坂学問所には、全国から英才が集まっていたので、諸藩との人脈が出来ていた。

秋月は、江戸を発って、備中松山藩の山田方谷、長岡藩の河井継之助らに会って、その後、萩の明倫館を訪ねた。ここで、長州藩士奥平謙輔（当時十九歳）に迎えられ、漢詩の添削を乞われて指導した。当時、他藩にも広く知られていた秋月に奥平はいく感激したという。

その後の出会い（文献17）

奥平は戊辰戦争で長州干城隊参謀として越後攻めに加わった。慶応四年「一八六八」十月、会津藩が降伏すると、奥平は秋月宛に一通の手紙をしたためた。手紙は若松の住職河合善順経由で、猪苗代に謹慎となっていた秋月に届けられた。

失意の秋月にとって一筋の光明を見出す思いだったに違いない。手紙の要旨は、「会津は徳川の代わりとなって戦い降伏した。今後は徳川に報いた心を朝廷のために仕えて欲しい、共に手を携えて新しい日本をつくらうではないか」である。

秋月は、「我々に朝廷に尽くす道を与えてくれるのであれば、必ずや国家のために命を捧げるであろう。我々が降伏し

たのは、会津藩の忠義を後世に伝えるためである」という趣旨の手紙をしたため、奥平を訪ねた。奥平はこの時、長州の前原一誠と共に越後の水原にいた。

ここで秋月が頼み込んだことは、「前途有望な会津少年に勉学の機会を与えて欲しい」であった。奥平はこれを快諾したので、会津藩は山川健次郎と小出鉄之助を抜擢し奥平に預けることにした。二人は猪苗代謹慎所を脱走し、越後にいた奥平を訪ね世話になった。

健次郎はその後、明治四年のアメリカ留学の機会を得、エール大学で理学を学んだ。悲惨な運命を背負った会津人の期待を一身に背負って、猛勉強したのである。帰国後は東京大学理学部教授となり、明治二十一年、日本人初の理学博士号を取得した。後に東大総長等を歴任し、奥平から贈られた書を終生自宅の床の間に飾って感謝の意を表したという。奥平との出会いが健次郎の人生を変えるきっかけになったからである。

一方、前原は一時期明治政府の参謀となったが、路線が合わず、明治九年には奥平と共に萩の乱の首謀者となり処刑された。この話は、会津では有名である。一方、萩では殆ど誰も知らないし、話題にも上らない。説明板や史跡は何もなく、奥平の墓を探り当てるのは至難である。

四一 萩市中央地蔵堂の白虎隊自刃の図

萩市唐樋町にある中央地蔵堂に「忠臣義士」とタイトルされた白虎隊自刃の図が奉納されており、町内の婦人会が当番制で掃除・花の入れ替えなどを続けている。

昭和十四年「一九三九」一月 藤田鴻輔（陸軍中将）撰、市川一郎（元市長）書として「奉納者不明だが、長く教材として残したい」という添書きがある。

地蔵堂は、明和五年「一七六八」に創建された龍福寺という律宗寺院の境内にあった。その後、龍福寺は焼失したが地蔵堂は焼失を免れ、昭和二十四年「一九四九」に現在地に移設された。

「忠臣義士」は松平容保書とされており、石版画印刷でサイズは四〇センチ×二〇センチ。付属している自刃者は十八名記載されており、氏名の漢字表記はかなり正確である。

なお、飯沼貞吉は「自刃セシモ蘇生今日存在」、池上新太郎は「同人は右十六名ト同所にて戦死セシ 以テ茲に姓

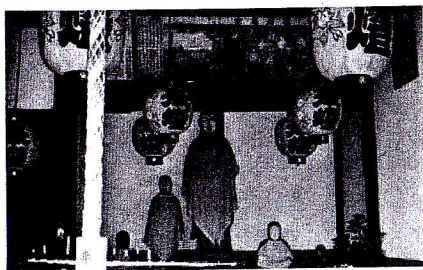


図1 萩市唐樋町に奉納された白虎隊自刃の図「忠臣義士」

名ヲ掲ケ忠節ヲ表ス」との付記がある。

この石版画は元会津藩士赤羽治平が発起人となり、明治十五年「一八八二」頃に当初五百枚、その後、好評により千枚追加印刷した（文献18）。原画は渡辺丈三郎、製版印刷は横浜の玄々堂である。

会津にも三〇四点ある。人数は十六名で頭髪、服装、武器はバラバラで、白虎隊出陣時の出で立ちとは大幅に異なっている。

地蔵堂のすぐ前に居住され世話人代表を務める萩原寿紀代さんは、「会津の長州に対する恨みは一三〇年経った今日まで続いているが、公演・物産展・市長交流などを通して市民レベルの交流が生まれ、雪解けムードも感じられる」としている。

四二 下関市功山寺万骨塔の白虎隊

長府は、毛利藩の支藩である長府毛利五万石の城下町である。功山寺にある万骨塔は、昭和八年に桂弥一が吉田松陰の意思の具現として、長門尊攘堂（現長府博物館）とともに建てられたもので、東西を問わず全国各県から代表的「志士」・霊石の寄進を集めたものである。吉田松陰、高杉晋作、木戸孝允、大久保利通、西郷隆盛、坂本龍馬、福沢諭吉、渋沢栄一ら蒼蒼たる人名が並んでいる。

万骨塔に白虎隊士霊石があることはあまり知られていない。会津でこの事実を初めて紹介したのは佐藤一男氏ではないかと思う。佐藤氏は、長く山師として会津地方の鉱山開発に取り組まれた。長州は石見銀山をはじめとして、鉱脈の宝庫であり古くから鉱山開発が進んでいた。このため、会津では長州から鉱山開発の指導を受けていた歴史的な経緯がある。佐藤氏は平成十三年「二〇〇一」に山口県を旅し、福島民報に全十回の連載記事を書いている。そして、第七回目に塩川市振興会事務局長の肩書で、会津白虎隊霊石を紹介した。(文献19)

この霊石は昭和八年「一九三三」に福島県教育会から寄進されたもので、十九人の自刃白虎隊士名と年齢が刻まれている。会津飯盛山に祀ってある十九人の自刃白虎隊士と比較すると、津田捨蔵が欠落し、飯沼貞吉が入っている。

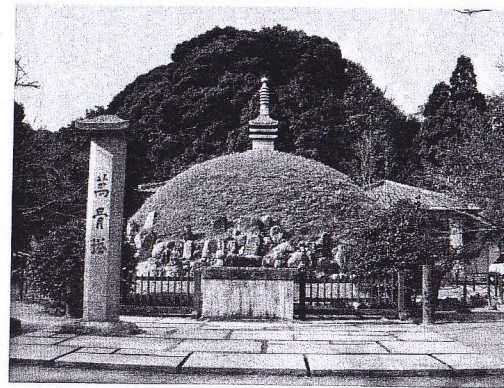


図2 下関市功山寺万骨塔正面



図3 万骨塔西側に安置された会津白虎隊士霊石と山川健次郎霊石

なお、白虎隊の会では平成二十三年「二〇一一」に山川健次郎霊石の寄進を申請した。万骨塔を管理している長府博物館友の会では、この扱いを巡って紛糾したが、会長の金田満男氏が英断を下し、許可された。その決め手は乃木希典と山川健次郎の交友であった。(文献20)

会津白虎隊士山川健次郎霊石は、磐梯山石を使って制作され、白虎隊霊石のすぐ上に安置された。式典には各方面から多数の方々が集まり、東西の志士を分け隔てなく扱う万骨塔の姿勢が強調された。

五 会津と長州の架け橋

会津と長州の間では様々な交流があるが、筆者の知る範囲でこれらを整理してみる。

五―一 吉田松陰をとりもつ縁

滝沢洋之氏は会津女子高教諭時代に『吉田松陰・会津を行く』という本を出版した(文献21)。出版は平成四年「一九九二」であるが、文末には、平成元年から『会津嶺』に三十五回に亘り連載したものをまとめた、とあるので、書き始めてから既に二十九年になる。

滝沢氏はこの本の中で、「松陰は、その生涯を『至誠』に生きた。一方、会津藩もかたくなまでも『至誠』を貫き通した」と述べている。また、滝沢氏は「松陰流の実践主義」に見習って、萩も訪問している。

このような考え方は、萩市で医師として活躍している山本貞寿氏と共通する。山本氏は吉田松陰ゆかりの地を訪ね現地との交流を始めて三十年になる。中でも、会津には既に五十回以上訪問しているという。この二人の交流が始まるのは当然であろう。

氏は、また、会津医師会会長の高谷雄三氏と医師会同士の交流を開始した。最初の出会いは平成十四年「二〇〇二」という。高谷氏は白虎隊士伊東悌次郎末裔で前衆議院議員伊東正義の親戚でもある。山本氏は平成十五年「二〇〇三」四月発行

の会津医師会報に「会津藩主・松平容保は朝敵にあらずあろうはずがない」というタイトルで寄稿文を寄せている。そして、会津に関する書籍はその殆どを読破しておられる。山本氏は平成十八年「二〇〇六」に「長州と会津の友好を考える会」を設立し、その後は毎年のように会津を訪問している。筆者が山本氏に京都で初めてお会いしたのは平成十九年「二〇〇七」二月であった。氏は講演会場に「忠臣義士」の写しを持ち込み、萩では地藏堂でこの絵を大切に管理していることを強調した。その後も継続的に交流を続けているが、氏の献身的な活動には頭が下がる。

氏は会津について理解すべき三条として

一 いわれなき朝敵の汚名

一 戦死者埋葬の半年に及ぶ不許可

一 凍餓蜜野の地といわれた下北への流亡

を挙げ、会津と接触する場合は、これらをしつかり理解して臨むようにと宣言している。

氏はまた、「和解交流をするのではなく理解交流をする。その目的は、日本のあるべき教育を理解交流から生み出すこと」と述べている。それでも、会津では辛い思いを何度も味わったという。

平成二十三年「二〇一一」九月三日、会津若松の稽古堂で「戊辰 会津戦争を考える」をテーマにパネルディスカッション

ヨンが開催された。パネラー六人のうち、会津関係が四人、萩からは山本氏が参加した。

ここで山本氏は下北の斗南会津会を訪問した時に、『下北哀史』を頂いていたく感銘を受けたことを皆さまにも紹介した



図4 会津戦争パネルディスカッション 右端が山本貞寿氏

い旨の発言をした。ところが、居合わせた某パネラーからは、「あなたにそういうことを言って欲しくない」とと厳しい口調でなじられ、言い返す言葉もなかったという。

この時、会場にいた筆者の福島県の友人は、「心もとない発言にいたたまれなかった」という。理解よりも反発が先行する状況は、現在も続いている。山本氏にとってはショックだったに違いない。しかし、氏はこの程度のことでは引き下がることはなく地道な活動を続けている。

五―二 会津高校と萩高校（合唱交流）

平成十八年（二〇〇六）十一月十一日に会津高校と萩高校の合同演奏会が山口県萩市で開催され、友情―時を越えて今―が両校の合唱部で合同演奏された。これは、第二十一回国民文化祭山口の一環として、実施されたものであるが、仕掛け人は山本貞寿氏である。作詞は会津高校合唱部、作曲は萩高校合唱部という組み合わせである。若人らしいとても良い曲なので、歌詞を紹介しておく。

友情―時を越えて今―

今 ここに 共にいられる

幸せを 共に歌える 喜びを

この大空に響かせよう
歓喜の 春 運動の 夏
哀愁の 秋 静謐の 冬
巡る季節をかけぬけて
信じ合えなかった日々
わがちあえなかった思い
すべてのこと（を）
今に託して 時を越え
たどり着いた夢のかけはし
今 ここから 明日を信じ
優しい未来に向かって
飛び立とう さあ

登場した合唱部のメンバーは、会津高校三十五名、萩高校二十九名となっている。

この合唱祭から三年後の平成二十一年（二〇〇九）七月十日、「友情」の歌詞を陶板にして、両校に寄贈された。陶板は平板の萩焼で横八〇センチ、縦三五センチ。

この企画は友情の歌を永遠に残したいとの思いから、「長州と会津の友好を考える会」の山本会長が企画し、「会津と長州の友好を考える会」の畑敬之助会長と相談しながら進めたもの。山本氏は「日本の政治が混迷している中で、会津と

福島県立会津高等学校合唱部
山口県立萩高等学校合唱部

合同演奏会

友情 ― 時を越えて今 ―

2006.11.11 SAT

県立萩高校体育館 11:35 ▶ 12:45
県立萩美術館・浦上記念館 14:00 ▶ 15:00

主催 ● 第21回国民文化祭山口県実行委員会・山口県立高等学校
協賛 ● 萩市・萩ライオンズクラブ・萩ロータリークラブ・萩高校同窓会・他有志

図5 友情―時を越えて今― 合同演奏会プログラム

長州が友として手を組み将来の日本のために礎を築いていくきっかけにしたい」と語った。（文献22）

五―三 会津藩士神戸岩蔵の墓慰霊

会津藩士神戸岩蔵を知る人は少ないかもしれない。神戸は会津藩が長州に送り込んだ間諜（スパイ）である。会津藩士・神戸内蔵盛義（百八十石目付役）の二男として生まれた。兄の民治が安政三年、会津鶴ヶ城内での刃傷事件に連座して謹

慎処分を受けたことに、弟の岩蔵はなんとか家名の回復をしたいと藩庁に願ひ出た。藩庁は岩蔵が幼少の頃、江戸勤番だった父のもとにいたため訛りがなく江戸弁を話せたため、間諜として長州に潜入させることにした。十八歳の岩蔵は文久三年「一八六三」六月二十三日に会津を発ち、長州に潜入し、会津に情報を送っていたが、慶応元年「一八六五」五月に長州藩に捕縛された。

岩蔵は取り調べに対して全てを堂々と白状したので、その立派な態度に取調役の一人が「お前当藩の臣になつてはどうか？」と尋ねると「ご親切は有難うございますが、忠臣二君に仕えずという諺もあるに、まして敵国の臣となることは思ひも染まぬ次第であります」と断り、「武士の御情、切腹をお許し願ひたい。それも出来なければ、せめて私所持の刀で御処刑下されたい」と訴え、結局、切腹は許されなかったが、望み通り彼の刀で処刑された。慶応元年「一八六五」八月、享年二十歳。（文献23）

大正八年「一九一九」になつて、元長府藩士の桂弥一は岩蔵の遺骨を菩提寺笑山寺の無縁墓の下に納め、その霊を弔つた。岩蔵の墓は下関市長府松小田南町の山中にある。

平成二十三年「二〇一一」一月二十九日に、白虎隊の会下関支部は会長吉井克也氏他二十三名が集まり、竹やぶの中から墓を発見。周囲の孟宗竹を伐採し、傾いた墓を立て直し、赤

五―四 恩愛の碑

―長州藩士榎崎頼三と白虎隊士飯沼貞吉―

白虎隊士飯沼貞吉が明治二年「一八六九」明治三年「一八七〇」の二年間、長州で養育されていたというショッキングな話は、筆者の白虎隊研究の最大のテーマであった。

榎崎頼三は慶応四年一月、長州藩第一大隊尾二番中隊指令として戊辰戦争に出征した。東山道を経由して、五月には白河口の闘いで大勝し、会津に進撃した。八月二十三日には会津城攻めに加わり、九月二十二日には開城に立ち会った当時二十三歳の武将である。

そして、十月十二日、会津降人四百余名を東京に護送し、役目を終えて萩に帰還する折、自刃に失敗した飯沼貞吉を連れ帰ったという。

その後、山口県美祢市小杉にあった榎崎頼三屋敷跡に貞吉を匿い養育した。この時この屋敷で貞吉の傷の手当をしたのが、高見フサ（当時十四歳）で、貞吉を「貞さー」と呼んで献身的に尽くした。頼三屋敷跡近くにお住いの高見家ではこの話を五世代に亘って伝えてきた。その貞さー口伝は、今なお新鮮で説得力がある。

榎崎頼三の生地は前原一誠・奥平謙輔と同じ萩の土原で、明倫館で学んだ。明治三年十月に国費留学生としてフランス渡り、刑法の研究に取り組んだが、明治八年二月結核のため

間神宮から招いた神職の司式で慰霊祭を実施した。また、墓の入り口には立て看板を建てた。（文献24）
白虎隊の会下関支部では、以降、毎年慰霊祭を続けており、この話は佐藤一男氏を経由して会津にお住いの岩蔵ゆかりの人に伝えられ、感謝されているという。



図6 会津間諜神戸岩蔵の慰霊祭（下関市長府、2011年）

パリのモンパルナスで亡くなった。パリで頼三を訪ねた第十三代内閣総理大臣桂太郎は、彼を逸材と認め一緒に帰国することを勧めたが固辞したという。

筆者は平成二十三年「二〇一一」九月十八日に、頼三の娘マツのひ孫にあたる松葉玲子さんに京都でお会いした。玲子さ



図7 山口県美祢市榎崎頼三屋敷跡に建立された恩愛の碑

んからは頼三は「貞吉は見どころがある若者だったので、連れ帰り面倒をみた」との証言が得られた。高見家と橋崎家とは明治以降一切の交流がない。これら二件の独立した証言を検証したところ、筆者は貞吉の長州滞在説を事実と認定した。(文献24)

これを受けて、美祢市関係者と白虎隊の会下関支部が中心となり、「恩愛の碑」の建立に向けて募金が開始された。そして、平成二十八年「二〇二六」十月十五日に落成・除幕式が執り行われた。碑は「過去の遺恨を超えた人間愛を伝える」ことを目的とし、裏面に「祈世界平和」と刻んである。碑は高さ約一五五センチ、幅約一八〇センチ。全国の約三百名から寄せられた浄財、計五百七十万円の「部」で建立した。(文献26)

同所には、会津から「会津身しらず柿」、萩からは「夏みかん」の苗が植えられた。

五―五 萩市と会津若松市

萩市長は会津若松との交流に熱心である。会津戦争から一二〇年経た昭和六十二年「一九八七」に、山口県萩市から会津若松市へ友好都市提携の申し入れがあったが、市民の猛反発で頓挫した。さらに、これに前向きだった会津若松市長は翌年の選挙で落選の憂き目にあったという話は有名である。

「これに對して、早川広中氏は「よく言ってくれたと思った」という。早川氏は元会津若松市長で飯盛山の「白虎隊記念館」の理事長を勤め、白虎隊に関する著書もある。

同氏によると、長州への恨みは戊辰戦争だけではない、明治維新以降も長州閥の高官が会津出身者の登用を妨害するなど長い経緯が積み重なった問題だという。

選挙の応援演説という場面とはいえ、うしろめたさがあったのだろう。

六 会津と長州の違い

六―一 会津と長州は対極

筆者は会津人と長州人に多くの友人を持ち、意見交換やイベント参加を通して付き合ってきた。また、幕末・明治期の対処方法について調べてきた。そして、会津と長州では考え方に対極というべき違いがあることを見出した。これを図8

東日本大震災の直後に、萩の野村興児市長が電話で会津若松の菅家市長にお見舞いの言葉をかけ、支援の用意があることを伝えた。会津若松側は不足している避難者向け物資の提供を要請した。これを受けて、萩市では約三百団体で発足した「東日本大震災災害を支援する萩市の会」が物資を募り、義援金も集めた。会津若松市に十四トントラックいっぱい、救援物資と義援金二千二百万円を届けたのは平成二十三年「二〇一一」四月二日。震災からわずか一か月という早業だった。

下関市からは同年五月に「フグ隊」と称した救援トラックが派遣され、福島市体育館で、下関名物のフグが振る舞われた。

その後、会津若松市の菅家一郎市長が同年七月に萩市を訪れ、野村興児市長らにお礼を述べると共に、震災後の風評被害に苦しむ現状を伝えた。萩市民三百人を前に菅家市長は「会津は安全。みなさんを歓迎します」と述べると、野村市長は「市民を募って行きましょうか」と、友好ムードを演出した。交流は歓迎するが、和解は別であるというのが、会津の認識のようである。

五―六 安倍首相の謝罪発言

安倍晋三首相が平成十九年「二〇〇七」四月十四日に会津若松市を訪れ、「先輩がご迷惑をおかけしたことをおわびしな

に示す。

一 幕末の長州は革命を推進したのに対して、会津は徳川家への忠誠を尽くした

二 長州は天皇や公家を利用したのに対して、会津は孝明天皇への忠誠を全うした

三 長州は機を見るに敏であるが、会津は何ごともおっとりかまえる方である

四 長州は状況に臨機応変に対応するが、会津は決めたことを愚直に守る

五 長州は目的達成のためには時に手段を選ばない、会津はあくまで義にこだわる

六 長州はなんでもありも厭わないが、会津は「ならぬことはならぬ」を死守する

七 長州は松陰流の実学・実践主義であるが、会津は義を重んじる精神主義が強い

八 長州は行動が迅速であるが、会津は腰が重い

例えば、東日本大震災（三

図8 長州と会津は対極

長 州	会 津
革命の推進 天皇・公家の利用 機を見るに敏 臨機応変 手段を選ばず なんでもあり 実学・実践主義 行動が迅速	徳川家への忠誠 孝明天皇への忠誠 おっとり 愚直 義にこだわる ならぬことはならぬ 精神主義 腰が重い

月十一日)後、わずか三週間の四月二日に二千二百万円と十
四トントラックに支援物資を満載して会津に届けるなど、そ
の迅速行動は会津では考えられない。

六―二 義に死すとも不義には生きず

会津には、「義に死すとも不義には生きず」という考え方
がある。

損得勘定を元に行動を選択する風潮は、古来より変わって
いないが、「義」を優先して行動の規範とする律儀さは会津
の特徴である。会津の子供たちは、「ならぬことはならぬ」
という仕の掟で育てられた。これは第一条の年長者の言うこ
とに背いてはならぬ以下、カビの生えたような「ならぬ
こと」を文字通り厳守することではなく、筋を通した
生き方、人として恥ずかしくない生き方をしなさい、という
意味である。すなわち、「義」に生きることと同義であると
筆者は考える。

司馬遼太郎は『歴史を紀行する』(文献28)に、会津藩に
ついて次のように記している。

会津藩というのは封建時代の日本人がつくりあげた藩
というものの中で最高の傑作のように思える。・中
略・この藩の藩士秩序そのものが芸術品とすらおもえ

るほどなのである。秩序が文明であるとすれば、この藩
の文明度は幕末において最も高かったとも言えるであら
う。

小川渉著の会津藩教育考(文献32)の緒言にはこう記され
ている。

「至誠貫天」――これが会津藩の全体を貫く規範であ
った。

会津藩教育の淵源は既に藩祖時代に発し歴代益々文武
を奨励して、子弟を教育した結果、幕末にはよく力を王
事に尽くし、かつ宗家のために藩国を犠牲にするを惜し
まず、特に白虎隊殉国のごとき、婦人殉節のごとき、壮
烈極る事績を世に残すに至れり

六―三 偽勅と錦旗の捏造

会津が「義」に拘ったのに対して、「目的のためには手段
を選ばす」でクーデターに邁進したのは、岩倉具視と長州一
派である。

まずは、慶応二年十二月二十五日の孝明天皇の崩御であ
る。天皇の突然の崩御の裏には毒殺説が色濃く残っている。

(文献3、8)

次は、十四歳の幼帝(後の明治天皇)の名の元に発した松
平容保らを誅殺せよという倒幕の密勅である。これは、薩長

が画策して、徳川慶喜の大政奉還の前夜、慶応三年(一八六

七)十月十三日に出された。大政奉還後では、倒幕の名目を
失うため急遽でつち上げたものである。これは、明らかな
偽勅である(文献29)。また、この時に授けたとされる「錦
旗」は、宮廷には存在せず、後に長州で秘密裏に「捏造」さ
れたものである(文献4、30)。現在、山口市後河原に「錦
旗の御旗製作所跡」という碑が建てられ、観光名所としてい
ることからして、罪悪感は何無なのであろう。

会津ではこんな畏れ多いことは、いついかなる事情があろ
うとも、考えだにできないだろう。「ならぬことはならぬ」
のである。長州と会津の違いはここにある。

長州は「目的のためには手段を選ばず」であり、やがて「な
んでもあり」に拡大し、歯止めがからなくなる。その行く
先が、太平洋戦争に繋がったのである。自国(自分)第一主
義だけでは、世界平和は望めない。

戊辰戦争において、錦旗は絶大な威力を発揮した。これは、
天皇に対する人民の畏敬の念がいかに深いかを物語ってい
る。これを逆手にとって利用するという発想は会津には無い。
偽勅の発行や錦旗の捏造などは「不敬」の極であって、決し
て許されることではない。これが堂々と実行されたことは、
我が国の歴史上に消すことのできない汚点を作ったことを指
摘しておきたい。

六―四 ある長州人からの手紙

上記のような幕末の会津藩と錦旗の捏造に関する筆者の持
論を、長州で名刺交換した人にメール送信してみたところ、
下記のような反論がきたので紹介しておく。

折角ボールを投げられたので長州人の一人として自分の考
え方をまとめるといふ観点で反論させていただきます。

一 錦旗捏造論：私にはどうでも良い話です。その時点では
天皇は利用する対象でしかありえないのではないでしょう
か。私は自民党员ですが、今、天皇退位に対して世間が騒い
でいるのをアホらしく眺めています。どっちでも良い、国民
生活とはまったく遊離している話と思うような人間です。信
長も、幕府も、陸軍も(ことに關東軍)、天皇の真の思惑が
どうであれ利用した歴史じゃあないですか。「不敬」という
なら歴史は天皇家に対し不敬だらけじゃあないですか。歴史
で天皇の意思が決定的に左右したという昭和天皇の終戦への
決意も、すでに敗北は決定的になったという共通認識の中
で、吉田茂的な層が天皇の重さを利用したという言い過ぎ
でしょうか。

二 白虎隊や会津人のすがすがしさは人間力という面で後世
に伝えねばならないと思います。司馬遼太郎が長州嫌にな
ったことは充分納得できます。長州が維新の原動力となった

要因は、その財力にあったのですが、その財力の裏側にはさまざまな辛抱があったと考えています。山の上の上まで畑に耕し、海を干拓し、畔という畔にはぜやこうぞを植えていった。いつまで待てば果実になるか計れない中で辛抱してきた。そのDNAは岸や、佐藤や安倍さんにも受け継がれていると思いますが、彼等以外を含めていずれも「清々しい」という気質は見られない。長州人が頑張る、勝利を得るという過程で失った気質ではありませんまいか。

同じ日本人でも、立場が変わればこうも考え方が違うものなのか。絶句。

七 むすび

戊辰一五〇年に当たって、会津の悲願「会津は朝敵に非ず」を再確認したいと考え、会津と長州について筆者なりの視点でまとめてみた。

会津の人は、今さらこんな古臭い話題に興味がないかも知れないが、世間では、未だに「会津は朝敵だ」と思い込んでいる人が多い。

教科書には、「幕府が長州を攻めました。その後、大政奉還があつて、王政復古になりました」などと書かれており、会津はどこにも出てこない（文献31）。同書で星亮一氏は、

「歴史の書換えと国家の謝罪」が必要だと主張している。

筆者から見ると、これは非現実的で、無理筋のように思える。「謝罪とか和解」というのもどこかピンとが外れているように思う。結局は、山本貞寿氏がいう「理解し合う」ことが、前進への道なのだと思う。理解し合うためには接点が必要である。本稿で紹介したように、これまでに多くの接点がある個人の努力によって築き上げられてきた。今後は、これらを拡大発展させていくことが求められる。

会津の「義」に拘る生き方はいつでも・どこでも・誰にとっても大切なのだ。一方、長州の実践・実学主義、機を見るに敏で迅速対応は同じく、いつでも・どこでも・誰にとっても大切である。これらの両者が融合すれば、国際的な視点で「世界平和」に向えるような気がする。その意味で、会津と長州の問題はとても重要な鍵を握っている。

参考文献

- 文献1 「明治維新という過ち」 原田伊織 平成二十七年一月十五日 (株)毎日ワンス
- 文献2 「呪われた明治維新」星亮一 平成二十九年四月一日 (株)さくら舎
- 文献3 「会津藩はなぜ朝敵か」星亮一 平成十四年九月一日 KKベストセラーズ

文献4 「幕末日本のクーデター 錦旗の刻印された官軍の野望」 p237 星亮一 平成二十五年十一月十日 批評社

文献5 「勝ち組が消した開国の真実」鈴木莊一 平成十六年六月二十八日 (株)かんき出版

文献6 「会津士魂13 鶴ヶ城落つ」早乙女貢 平成十一年七月二十五日 (株)集英社

文献7 「会津の悲劇に異議あり」八幡和雄 平成二十四年十二月五日 (株)晋遊舎

文献8 「幕末史」半藤一利 平成二十年一月十五日 (株)新潮社

文献9 「平成日本への尋問の筋これあり」原田伊織 平成二十八年九月十六日 会津人群像第三十三号 歴史春秋社 (株)

文献10 「京都守護職始末」遠山茂樹・金子光晴 昭和四十年八月十日 (株)平凡社

文献11 「会津戊辰戦死者埋葬の虚と実」野口信一 平成二十九年十月一日 歴史春秋社 (株)

文献12 「檜崎頼三陣中日記」檜崎頼三 明治元年十二月 私家本

文献13 「幕末・会津藩士銘々伝(下) 伴百悦」前田宣裕 平成十六年七月二十日 新人物往来社

文献14 「偽りの明治維新」星亮一 平成二十年一月十五日

大和書房

文献15 「ある明治人の記録」石光真人 昭和四十六年五月二十五日 中央公論社

文献16 「藻汐艸」飯沼関弥 昭和十三年 私家版

文献17 「山川健次郎伝」星亮一 平成十五年十月二十日 (株)平凡社

文献18 「明治時代初期の白虎隊自刃の図について」川延安直 平成二十二年三月二十日 福島県立博物館紀要第二十四号

文献19 「山口県萩市を行く(7)」佐藤一男 福島民報記事 平成十三年三月十三日

文献20 「山川健次郎と乃木希典」笠井尚 平成二十年八月一日 長崎出版 (株)

文献21 「吉田松陰・会津を行く」滝沢洋之 平成四年十二月二十五日 歴史春秋出版 (株)

文献22 「長州から友情の陶板」福島民友記事 平成二十一年七月十一日

文献23 「会津間諜・神戸岩蔵」昭和六十三年五月五日 会津史談第62号

文献24 「会津隠密の墓長府で清掃」朝日新聞山口記事 平成二十三年一月三十日

文献25 「飯沼貞吉長州滞在説の検証」会津史談第九十号

平成二十八年四月二十五日

文献26 「維新の恩愛美祿に刻む」中国新聞記事 平成二十八年十月十六日

文献27 「萩市が二千二百万円若松に贈る」福島民友記事 平成二十三年四月三日

文献28 「歴史を紀行する」司馬遼太郎 昭和五十一年十月二十五日 文春文庫

文献29 「慶応三年十月の倒幕派と密勅」井上勲 昭和四十八年十二月 学習院史学一〇号

文献30 「王城の護衛者」加茂の水」司馬遼太郎 平成十九年九月十四日 講談社

文献31 「会津と長州、幕末維新の光と闇」星亮一・一坂太郎 平成二十一年三月二十日 講談社

文献32 「会津藩教育考」小川渉 昭和六年 マツノ書店（平成十九年復刻）

寄贈図書

（平成三十年二月迄）

。歴史春秋

第85号・第86号

会津史学会

。土佐史談

第264号・第265号・266号

土佐史学会

。民具マンスリー

第49号 第10・12号

第50巻 第1・9号

神奈川大学日本常民文化研究所

。会津会報

第123号

会津会

。史談河東

第80号

会津河東町史談会

。先人の思いを後世に

会津弔霊義会百年誌

。信念を貫き通した会津藩士秋月梯次郎 秋月梯次郎顕彰会

。余市文芸

第29号・32号・37号・38号・39号・42号

余市町文化協会

。文化の道

—文連協・市民文化祭創立55年記念誌—

会津文化団体連絡協議会 会津若松市民文化祭

